武家が実権を掌握

源平の合戦を制し鎌倉幕府を開いた源頼朝は、富士の裾野で大がかりな巻狩りを行った。巻狩りとは、山野に潜む動物を四方から取り巻いて追い出し、それを狩りとる軍事訓練で、頼朝には征夷大将軍としてみずからの力を顕示する目的もあった。

頼朝の命に従って全国から何十万人もの武士やその家来が集まったと言われている。

「富士川合戦図」（市立博物館蔵）：1180年の富士川の合戦で、平氏は水鳥の羽音を源氏の襲来と間違えて、戦いを交えることなく敗走したと言われている

鎌倉・室町・戦国時代

「頼朝公富士之御狩図」（市立博物館蔵）：巻狩りのときに頼朝の発した言葉がもとになり、その地域の地名となったものも多い

悲話・曽我物語の誕生

頼朝の富士の巻狩りの最中に、日本三大あだ討ちの一つ、曽我兄弟のあだ討ちが遂げられた。頼朝に重用され巻狩りにも同道していた工藤祐経（くどうすけつね）を、曽我十郎と五郎の兄弟が父のかたきとして討ち取った。十郎22歳、五郎20歳にして、苦節17年目の本懐であった。十郎はその場で討ち取られた。五郎も取り押さえられ、翌日に頼朝の取り調べを受けた後に首をはねられた。その首を洗ったとされる場所

曽我兄弟の像（曽我寺／久沢）

には、今も首洗い井戸が残されているほか、市内には曽我寺・曽我八幡宮など曽我兄弟にちなんだ数々の史跡が見られる。

「曽我兄弟工藤祐経之狩家江討入之図」（市立博物館蔵）

17年もの長きにわたった兄弟の苦労と潔さに人々は共感し、このあだ討ちはいつしか『曽我物語』としてまとめられ、全国津々浦々に広まった。謡曲や歌舞伎にも登場し、大正～昭和期には国定教科書にも取り上げられ道徳教育に利用された。

曽我寺には曽我兄弟の墓、位牌がある

日蓮が『立正安国論』を書き上げる

1257年、日蓮は岩本の実相寺に入った。実相寺には、天台宗草創期の高僧円珍（えんちん）が唐から請来した一切経（いっさいきょう）が格納されていた。これを2年にわたって閲覧した日蓮は、鎌倉に戻ると『立正安国論』を一気に書き上げ、幕府に献上した。

当時戦乱が絶えない中、天災や飢饉が続き、民衆の心には深く世情不安が刻み込まれていた。日蓮は、この災いは念仏の流行に原因があるため、これを禁じなければ内乱と他国侵略を招くとした。これらの災厄を防ぐには法華唱題（ほっけしょうだい）を広めるよりほかなく、法華経を用いない為政者（いせいしゃ）は早死にすると説いた。

幕府は、幕府に真っ向から意見した日蓮を迫害し、日蓮宗は弾圧された。しかし弾圧されればされるほど、人々の心に日蓮宗が深く信仰されることになった。

境内にある日蓮上人の像（上）と実相寺山門（下）

戦乱の世に突入し、武将による覇権争いが続く

1467年の応仁の乱をきっかけに、今川氏、武田氏、北条氏のせめぎ合いが始まった。1554年には、今川義元・武田信玄・北条氏康の三将が同盟を結び、いったんはこの土地に平穏が訪れるが、今川義元が1560年の桶狭間（おけはざま）の戦いで織田信長に殺されると、富士地方は武田氏の支配下に置かれる。

続く1575年の長篠の戦いで、織田・徳川の連合軍が武田を退け、徳川家康が三国を支配するようになる。本能寺の変で織田信長が殺され、さらに豊臣秀吉が天下を制圧すると、秀吉によって家康は関東に移され、富士市一帯には秀吉の家臣が入った。

このように室町～安土桃山時代は戦乱が絶えず、駿河を支配する武将も激しく移り変わった。やがて家康が天下を統一するに至り、ようやく安定した統治が繰り広げられることになる。